



# 産経新聞

## 直前・事後の病院搬送も

「終の棲家」とも称される特別養護老人ホーム(特養)だが、緩やかに状態が低下していく入所者を、静かに看取れるかどうかは、施設の力量による。医師との協力が十分でない、看取り間際の高齢者を救急車で病院に運んだり、呼吸停止後に運んだりすることもあるという。早急な環境整備が求められる。(佐藤好美)

### 特養の看取り、施設の“力”次第

の呼吸が止まった後、施設の車で運んだこともある。本人と家族が延命を希望せず、特養での看取りを強く望んだからだ。嘱託医は事前の診察、情報共有をしておき、呼吸停止後の搬送も了解済みだったが、介護現場の緊迫感は大きかった。

介護事情に詳しい外岡潤介護士は「呼吸停止した入所者を、特養の職員が嘱託医に運ぶこと自体には違法性はないが、警察から呼び止められたときなどに事情聴取を受け、あらぬ誤解を招きかねない」という現実のリスクはある。特養は看取りの場になっているのに、それを支援する制度や環境が整っていない」と指摘する。

特養の看取りには、さまざまな課題がある。①施設側が、本人と家族の意向を踏まえ、経過説明や支援ができるか②入所者の健康状態について、医師と日頃から情報共有があるか③医師が臨機応変に死亡診断に対応してくれるかなど。作成される死亡診断

書は、医学的、法律的に人の死を証明するもので、診察をしてきた医師が書く。看取り間際の搬送がどのくらいあるかは不明だが、特養の事情に詳しいNPO法人「Uビジョン研究所」の本間郁子理事長は「呼吸停止した入所者を、施設が医療機関に運ぶケースは、地方に行くほどある」と指摘する。特養が町外れにあることが多い地方では、距離の遠さが訪問診療の障害になる。

医師の少ない地域の、ある有料老人ホームの看護師も「うちの看取りには課題がある」とする。健康管理をする医師は病院の勤務医。定期的な訪問はしてくれるが、急な訪問ができない。病院を空けられないからだ。診療所の医師を探す方法もあるが、ホーム側も病院に頼る面がある。日頃、高齢者の救急搬送は受け入れ先探しに難しい。だが、病院なら休日や夜間の発熱や肺炎でも、連れて行けば診てくれるし、入院の融通も利く。一方で、この看護師は「人生の最後は医師に任せてもらいたい、生活の場で静かに見送り、スタッフや入所者みんなで送り出したい」とも話す。

事後の搬送が起きる背景には、病院の環境変化もある。本間理事長は「最近では、看取り目的や点滴だけの患者の入院を、病院が受け入れなくなっている。特養が最後まで生きるための場所になるには、習朝でもいいから、医師が来てくれる関係が不可欠。体制づくりを急いでほしい」と言う。

冒頭の特養は、看取り間際の搬送をせずに済むようになり、本人や家族に「希望する最期の場所」を聞けるようになった。ただ、医師側は特養での看取りに診療報酬上のメリットは薄い。施設長は「今は、意識の高い医師が嘱託医を引き受けて看取りをしている。来てくれる医師を見つけれず、困っている特養は多いと思う」と話している。

### 医師・施設・家族の信頼構築がカギ

厚生労働省が昨年5月から半年間に約800の特養を調べたところ、「退所者に占める死亡退所」を「80%以上」と回答した特養は半数を占めた。だが、施設内で看取れたかとなると、数字はもっと下がる。看取れる施設と看取れない施設の差がうかがえる。特養に指導や助言を行う

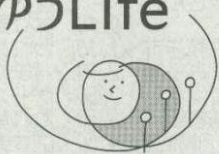
「エイジング・サポート」の小川利久代表は、「施設看取りが進まないのは、施設側の責任も大きい」と指摘する。「看取りは医師の責任だと考え、深夜も構わず呼んだり、家族への説明もお任せでは、医師は対応しきれない。家族が行う看取りを施設側が多職種で支援するのだという覚悟がある」とする。

「24時間以内なら、医師は『死亡診断書を取りに来てください』でもいい。『その時』に立ち会えなくても、診療所の診察を終えた夕方に顔を見に行くのでも、翌朝、診察前に行くのでもいい。医師と特養と家族に信頼関係があれば、問題にはならない。亡くなった人、いかに丁寧に送れるか、みんな考えることが必要。医療と介護の連携は本来、そういう人間関係を作ることだ」

## 社会保障



ゆうゆうLife



過去10年の間には、入所者



実際に施設で看取りをサポートするのは、介護職や看護師だ(写真はイメージです)

実際に施設で行う施設では、臨終間際をサポートするのは看護師や介護職のことが多い。医師とは情報共有するが、息を引き取ったのが夜間なら、翌朝まで連絡を控える施設もある。医師に過剰な負担をかけないためだ。栃木県で在宅患者の看取りにも対応する医療法人アスモの太田秀樹理事長は、「特養は、看取れる医師を本気で探さなければいけない。医師

「24時間以内なら、医師は『死亡診断書を取りに来てください』でもいい。『その時』に立ち会えなくても、診療所の診察を終えた夕方に顔を見に行くのでも、翌朝、診察前に行くのでもいい。医師と特養と家族に信頼関係があれば、問題にはならない。亡くなった人、いかに丁寧に送れるか、みんな考えることが必要。医療と介護の連携は本来、そういう人間関係を作ることだ」